



地域を紡ぐ糸となって

奥万里子 / おく・まりこ
生協連合会きらり会長、APLA評議員

去る2000年12月のJCN C 関西ネットワーク交流(岡山・京都・大阪)は、学生さんや社会人の方と語り合う機会となって楽しさもあることながら、多様な人たちの問題意識に触れ、それまでひとりよがりだった私の生協活動の視点を大きく転換させるものでした。

JCN Cの22年の取り組みのなかで、私の一番の関心ことは、BGAの農民が「生きるための農業」を「協同のしくみ」として作り、自立した個人農家となって、「地域自立の意志」をもって地域内流通にまで及ぶ成果を上げられたことでした。

これらの試行錯誤のプロセスの共有は、オルタナティブな生き方を模索するアジアの農民・消費者の仲間意識をつなぎ、影響を与えるものだと思います。ネグロスとの出会いは私にとって「食べる・生きる・暮らす・働く」ことの意味や価値が問われるほどの強い衝撃がありました。そして、「私の地域社会をあらためて視る」「自らの活動を地域に投影させる」機会をもらってきたように思います。生協が媒介する「いのちを守り育む女

性」と「いのちの糧を作り出すことを生業としている農民」との提携関係も、互恵の交易であると同時に、それぞれの地域の土着の人たちによる弾力的な運動形成と協同事業連帯さらに地域の経済自立が不可欠だということに気づいてきました。ネグロスでの経験を「APLA / あぶら」へつなげることは、グローバル化の加速・市場経済主義・格差社会など日本社会のひずみに対して、「あなたは何かができるの?」という問いかけに思えます。今後、「APLA / あぶら」の事業活動によって、それぞれの地域性をもった社会運動の拡がりと同時に、多様な協同事業が展開されていくことでしょうか。失敗を怖れず、知恵をしばって自らが生み出す力で超えていくことになるのだらうと想像します。「APLA / あぶら」を介して、アジアの連帯活動のなかで、豊かな生活基盤が、人びとの結び合いによって、いくつもできていけばいいと思います。アジアに思いを馳せながら、関西の地で、私も地域の紡ぐ糸になり、地域自立を目指した協同社会づくりに参加し続けていきたいと思っています。 ■

BGA: バランゴンバナナ生産者協会。フィリピン、ネグロス島にある、バランゴンバナナを一番初めに出荷した地域のバナナ生産者たちの組織。「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ(水たまり)」が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

CONTENTS ■ HALINA 01 2008.08.01

- 02 Relay Essay ポコポコ① 地域を紡ぐ糸となって◎奥万里子
- 03 特集 “みんな同時代を生きている” APLA設立記念シンポジウム『人びとが創るもうひとつのアジア』報告
 飢餓からスタートした自立への道◎リト・エスタマ
 独立から6年—ゼロからのスタート◎ダニエル・ペレイラ
 野良から世界へ—山形の女性・若者達がつくる地産地消運動◎疋田美津子
 フェアを超えたオルター・トレードとは?—無農薬バナナ民衆交易から20年◎堀田正彦
 日本が落ち目になるのはとてもいいことですよ—まとも◎村井吉敬
 海外パートナー・今後APLAに期待すること
- 10 堀田正彦のアジア食い倒れ①
スマトラ島で食べた『スップ・トゥラン(Sup Tulang)』◎堀田正彦
- 10 むらて歩く① 水路と産廃処分場◎大野和興
- 11 あっちこち雑学手帖① 災い防ぐんだら模様◎松田麻衣子
- 11 じゃらん・じゃらんアジア① ジュゴン受難◎村井吉敬
- 12 撮っておきアジア① カンボジア、ブノンベン◎中村真珠
- 13 APLA生活① パレスチナ産オリーブオイル◎吉澤真満子
- 14 Voice from APLA partners 原油・米高騰—アジアの地域の人たちは今…
- 15 APLA共同代表、事務局スタッフからご挨拶

表紙のことば
タイ東部の中心地コンケン地方の綿織物。20年以上も前に購入したが、何度洗濯しても鮮やかな色は失せない。東北タイは「イサーン」とよばれる農村地帯で、ラオス・カンボジアとの国境に接し、昔から伝統的な織物が盛んだ。高床式農家の床下には、必ずといっていいほど木と竹で作られたシンプルな織り機がある。かつては衣服から寝具まですべて村の女性たちが織ったそうだ。若い女性たちが都会に流出する中、少しでも次の世代に農村の伝統を伝えようとお母さんたちは村ごとに織物グループを作っている。この布を織った女性に聞いた。「毎朝、夫や子どもたちが家を出た後、ゆったりした気持ちで織り機の前座る。雑念があるとうまく織れない。スーッと深呼吸をしてから糸を選び、デザインを考える。織り機の前では私だけの世界が広がる…」(大橋成子)

特集

みんな同時代を生きている

APLA設立記念シンポジウム『人びとが創るもうひとつのアジア』報告

APLA / あぶら設立を記念するシンポジウム『人びとが創るもうひとつのアジア』が5月17日、東京で開かれた。パネリストは4人。共同代表の村井吉敬さん(早稲田大学教授)がファシリテーター



APLAの海外パートナーもシンポジウムに参加しました。(写真上)シンポジウムの様子。(写真下)



1をつとめた。シンポジウムでは、それぞれの経験を話し合いながら、いま世界を覆う貧困や環境破壊、その背後にある市場競争の激化と農民世界の崩れにAPLAがどう対峙し、何ができるか、何

をしなければならぬか、が話し合われた。そこから浮かび上がってきたのは、いま人びとは地域や経済・社会の状況の違いを超えて同じ時代を生き、苦しみも喜びも悲しみも分かち合えるを関係者共有していること、だからこそ日本を含む農民どうしの経験や知恵の交換、人々の交流が大切になっていること、の再確認であった。村井さんは最後に、「落ち目の日本を喜びあおう」という言葉で、その思いを締めくくった。(本誌編集長:大野和興)

飢餓からスタートした自立への道

リト・エスタマ / Lito Estama
NARB(ナガン農地改革受給者組合委員長)

フィリピン・ネグロス島のエスペランサ農園から来ました。祖父の代から砂糖労働者で、自分自身20歳の頃から農園の土地闘争を行って来ました。現在は5人の子ど

もの父親です。農園の地主はベネディクトというマルコスの取り巻きといわれていた人でした。ベネディクトの下で働いていた時代、私たちは何かを決定する権

利も力もなかった。生活費や学費も十分ではなかった。子どもたちにも米を食べさせたかったが、耕す土地もない。何かを作るときは地主の許可を得ないといけませんでした。そして許可はほとんど下りませんでした。私たちは地主にコントロールされる生活をずっと続けてきたのです。20年前、農地改革法が制定され、

地主から解放されるチャンスが巡って来ました。私たち76家族は、農地改革の受益者組合を作りました。地主からはさまざまな嫌がらせを受け、電気、水道が止められ、ブラックリストに名前が載り、仕事ももらえませんでした。地主は武装した私兵に土地を守らせ、私たちの生活まで見張り、恐怖感を覚えさせて土地の権利を諦めさせ



ダニエル・ペレイラさん

ネシアの26番目の州という位置づけで扱われ、私たち東ティモールの民はそれぞれ3つの方向で抵抗運動をしていました。ひとつは外国に問題を訴える外交的な運動。もうひとつは地下組織での活動。そして最後のひとつが武装部隊です。森の中で銃を持ってインドネシア軍と闘う。その中で私は、地下活動組織に参加していました。現在の東ティモールには13県、65の市町村、442地域があり、17の異なる言語が使われています。私はインドネシア時代からジャーナリストとして仕事をしました。2002年からKSIというNGOで仕事をしようになりました。学生運動にも参加して、人びとを組織化していくことを学びました。KSIの名前の由来は小川。小川が集まって大きな流れの川になるという意味を持つ

ています。私の活動地域はエルメラというコーヒーが非常にたくさん取れる産地です。多くの人は畑の近辺に住んでいます。土地を持っているわけではありませぬ。それを知り、そのコーヒー労働者たちの土地闘争を支援する活動に入りました。農民の組織化に関わる仕事をする中で、政府の人と関わる機会がよくありました。県知事にならないか、役人にならないかという誘いがありました。私は人びととともにありたいと思います。今に至るまで、東ティモールの独立闘争は終わりましたが、人びとの貧困からの開放という課題は残っています。ATJと知り合う中で、NGOの心を持ったビジネスというコンセプトを知ることができました。私の仲間でもオルタナティブな形の商業に関心を持っている人はいます。具体的な活動としては、サメ県とエルメラ県でコーヒーとトウモロコシの物々交換をしています。これまで10トンのトウモロコシをエルメラに送り、200ドルの収益を得ることができました。東ティモールは、異なる地域と関

係を結んでいくことで問題を解決していけると思います。また、私たちには、国際連帯が必要だと思います。東ティモールは土地改革運動を推し進めて行きたいと思っている。ネグロスの経験と共有して私たちがもっと強く生きていけると感じました。ここで私たちが考えていかなければならないのは、一緒に何をやっていくか、何をやっていけるかと

いうことだと思っています。APLAに期待すること 農民、活動家などを表彰し、特に若い人びとが農民として生きていくことに自信を持っていく。いろいろな企画があるといい。不可能なことを可能にしていこう。それみんなできよう。その気持ちをもち続けたいと思います。 ■

野良から世界へ 山形の女性・若者たちがつくる地産地消運動

疋田美津子／ひきた・みつこ
しらたかノラの会

こんにちは、山形県白鷹町しらたかノラの会からやってきた疋田です。「ノラ」という名前は野原の「野良」からつけた名前です。

若い世代には馴染みのない言葉ですが、自由さ、ワイルドさが気に入って、私たちの名前にしました。3年前から活動を始め、現在は11人のメンバーがいます。

白鷹は、山間の町です。平野部と違って田んぼの面積が小さいの

で、野菜、果樹、ハウス栽培のトマトなどを組み合わせて、小規模複合農業の伝統的な農業をやっている地域です。

私が山形に移り住んで17年になります。夫の家族が経験した40〜50年というのとは非常に変化のあった期間でした。父母の世代は布団や農具、何から何まですべて自給自足でしたが、現代ではそういうのは全くなくなりました。私が



リト・エスタマさん

ようにしました。その間子どもたちは学校に行けなくなり、食べる米もなくなりました。このような闘争が10数年続きましたが、私たち76家族は諦めませんでした。諦めたらみんなバラバラになってしまう。選択の余地はなかったのです。その間、裁判闘争もしました。マニラや大統領府にまで直訴しました。しかし、2003年、最終的に農地改革省から土地の認定を得て自分たちの土地に砂糖キビを収穫しに行ったとき、発砲した私兵の銃弾によって私の甥であるジョニーが殺され、女性が2人負傷するという事件が起こりました。土地闘争をずっと支えてきたのは女性たちでした。男は農園主に監視されて農園から出られないため、女たちが街に出て仕事をし、洗濯をして、家を守りました。ま

た、JCNCが様々なネットワークを通して私たちの闘いを支援してくれました。この支えがなかったら今の私はないと思います。どこかで殺されているか、仕事を求めてネグロスを出ているか。2003年に土地の登録証を手に入れ、私たちは独立した農民として地主から解放されました。獲得した土地140haを76家族で分け、その一部を共同農場として使っています。農民として農業を始めた私たちには、農業資金がありませんでした。その時支えてくれたのも日本の連帯でした。APLAに期待すること 農民同士の交流の場をつくり、

アイデアや考え方など、知恵を出し合って共通の価値観を作り出したい。その価値観とは、自分たちで何かをつくりだすこと、人と人とのつながりを大切にすること、といったことです。共有できる価値観がない限り、一歩先に進むことができません。東ティモールの土地問題ではお互いの経験とたがいを交換できます。助け合いながらすることが大切になってくると思います。 ■

東ティモールは2002年5月20日、正式に独立しました。450年間、ポルトガルの植民地下にあり、その後25年間はインドネシアによる支配が続く、インド

APLA海外パートナー ①

NBA (フィリピン・ネグロス島)

ナガシ農地改革受益者組合(NARB)、バラゴンバナナ生産者協会(BGA)、ネグロス有機農家連盟(ANOFA)の頭文字をとって名づけた農民ネットワークの団体。地主との長く激しい土地闘争を経て農地を獲得し、元砂糖労働者であった75家族で組合を結成し、家族農業と協同組合による無農薬砂糖キビ生産を進めているNARB。オルター・トレード・ジャパンが無農薬バナナの輸入を始めた最初の産地であり17村のバナナ生産者約700家族を組織しているBGA。JCNCが支援してきたPAP21運動から生まれた野菜農家約50家族で結成したANOFA。現在この3団体で協力し、共同出荷やまちの消費者との連携を作るなど、ネグロス版「地産地消」運動に取り組み始めた。



NARBの多目的集会場のオープニング祝会に集まったNBAのメンバーたち。

APLA海外パートナー 3

KSI/HAKADA (和解と社会変革をめざすNGO)

KSIは、2000年に設立された東ティモールのローカルNGO。前身は東ティモール大学の学生が中心となって作った学生グループ・東ティモール学生連帯評議会。地域和解と社会変革を通じた地域の自立支援を目的に活動している。ポルトガル・インドネシア時代、そして独立後も住民にとって解決されていない土地問題に関する調査・提言やさまざまな暴力の犠牲者への支援、農村部の協同組合づくり、女性たちが中心のキオス(農村の日用品を扱う店)運動を通じた民衆流通など幅広い活動を行っている。HAKADAはエルメラ県を中心にした元学生活動家が組織したNGO。KSIから独立したメンバーで2005年に結成。協同組合づくりを中心に農村発展のために活動している。



KSI/HAKADAのメンバーたち。

もうひとつ、1965年以降、日本では自給自足型・地産地消型



堀田正彦さん

を超えたオルタナティブへ」と大げさなタイトルがついていますが、フェアトレードと私たちがどう違うのかという話ではありません。基本的には市民同士がやる交易はすべてフェアトレードであると考

こから私たちの民衆交易が生まれたのだと実感しています。中国の毒入り餃子、牛肉偽装事件などここ数年を巡る問題が起きていますが、1970年代から80年代にかけて地域で生協運動が

のルートを生産者とともに確立してきました。その中でネグロスの飢餓に出会った。現実にネグロスを訪れ栄養失調の子どもたちを胸に抱いた感触を拭い去れないまま日本に帰り、南の人たちとどうやって付き合っていくかというところから、民衆交易という概念が生まれました。決意してものを



テッサ・ケサダさんからAPLA設立に向けて歌のメッセージが送られた。



疋田美津子さん

今確信しているのは、日本政府は日本から農業を無くそうとしているということ。いま村は危機的状況にあります。白鷹は酪農の割合も多いところ。アメリカから入る飼料価格が上昇、とくにトウモロコシはバイオエタノールに転用されるという

これからのAPLAの活動の中には、アジアの地域自給を支援してきた私たち自身の地域自給をどうやって作り出すかという視点が絶対必要だと思えます。それを作り出して初めて、ダニエルヤリトたちと私たちが本当に対等な

APLAに期待すること JCN Cの22年間は、日本で食べ物を作っている人たちがアジア

一に考えてやっていきたい。い

APLA海外パートナー 2

CORDEV (Cooperative For Rural Development: 農村発展のための協同組合)

ルソン島北部は96年からバラングンバナナの産地のひとつに加わった。CORDEVはバナナ生産者の組織化を担ってきたが、08年、地産地消をめざす協同組合に組織を再編。スタッフも



CORDEV協同組合の設立総会の様子。

びるほど、外貨を稼ぐほど、輸入を増やさなければならなかった。

東ティモールやフィリピンのように、土地を奪い返す、海を奪い返すというところまではいきませぬが、第1世界が落ち目になることは第3世界にとってはいいことであると考えています。水平的につながれる可能性が出てくるからです。

かつて東南アジアには独自のネットワークがありました。そしてそれぞれの地域の豊かさがありました。それが植民地化によって壊され、グローバル化で壊された。日本の中でもグローバル化しながら格差社会へと突入しています。ダニエルさんが東ティモールでの物々交換の話がされました。やってみるおもしろさがあると思います。フィリピン、ネグロス、東ティモール、他にも拡がりを作り出しながら、楽しく生きていける組織になって、APLAがATJを指導する。期待をぶつけるくらいの組織として横につながって若い人たちが生き生きと生きていける仕組みをつくっていききたいと思えます。

2008年5月19日。APLA設立総会後、すっかり打ち解けあった海外パートナーたちに、今回の来日の感想と、今後どんなことを進めていきたいかを聞いてみました。

今回の来日でもとても有意義だったことは、APLAでつながった各国のパートナーに会えたことだったと皆が口を揃えています。特にネグロスからの代表者は、“日本とネグロス”というこれまでの二者の関係だけではなく、インドネシアや東ティモールからの仲間との新たな出会いが大きかったといいました。東ティモール代表ダニエルさんの独立闘争時代の話、ネグロス島リトさんの地主との壮絶な土地闘争の話など、お互いの経験を知ることにより、自分たちだけの問題だと思っていたことが世界中の問題であることが知ったといえます。加えて、山形県白鷹町の「しらたかノラの会」を訪れ、農産物の生産から販売までを、そこに住む農民たち自身で運営している様子を目にしたことは、アイディアの宝庫で、自分たちの村でもできるかも！というきっかけをもら

海外パートナー・今後APLAに期待すること

【海外パートナーより提起された4つの課題】

1. 自給自足
2. 食料・医療・教育のための現金収入
3. 持続可能な農業を選択
4. 基本的なニーズの充足

【解決へ向けた活動】

土地問題	●支援グループ ●法的支援など
アドボカシー（啓発活動）	●グローバル化 ●オルタナティブトレーニング ●持続可能な農業 ●農地改革
市場	■メディア ■文化活動 ■青年プログラム ■キャンペーン ■農民奨励賞など
スキル／技術	●有機農業技術 ●農場と協同組合の運営管理 ●食品加工技術 ●代替技術
	■生産者の交流 ■育成プログラム ■見本市や博覧会

えたいといえます。

この交流を経て、自分たちが地元へ戻った時に何をしようかと、それぞれが希望と元気を胸に地域へ帰っていききました。

また、今後APLAで何をしたいかアイディアを出し合い、様々な課題を4点にまとめました。これらの課題を解決するために、どんな活動が必要であるかを分類してみました。【左図】

今後、提起された課題を念頭に、各地域でやりたいこと、必要なことを進め、定期的に海外パートナーとうして顔を合わせ交流していききたいということになりました。

APLA海外パートナー ④

OCeAN（オーガニック・コミュニティ・アクション・ネットワーク）

エコシュリンプの輸出・加工を行うATINA社と両輪の活動を行うOCeANは、エコシュリンプの産地における社会活動を担う。「命・自然・暮らしを守る」を基本理念とし、環境・社会改善運動を有機技術の開発と普及を実現するために活動を行う。OCeANの中の運動部門では、スラバヤを中心に、地元の高校と連携したマングローブ植林、伝統的なエビの養殖池の水質を守るためのせっけん作りやその普及運動、川の清掃活動など、幅広い市民活動を行っている。



OCeANのメンバーたち。事務所の前にて。

の食料の物流から、大都会中心の大量生産、大量販売、長距離輸送の形態も変わりました。インドネシア、東ティモールでは、17世紀ころに東インド会社が入り、その地で豊かに自給自足の暮らしをしていた人びとの村を壊し、オランダで食べるためのコーヒーや食料を無理やり作らせ、農民は労働力として搾取されました。17世紀に始まった北による南の支配は、現在のグローバルゼーションという経済構造の根幹にあります。だからと言って、フェアトレードとして日本の消費者が買えば豊かになるというのは大きな矛盾であって、コーヒーをいくら作っても、自給自足の生活が取り戻せるわけではない。

バナナを買うこと、コーヒーを買うことはひとつの手段にすぎません。本当の目的はいかにして本来の豊かな緑のある島を取り戻せるかということです。そのために、農民たちは自力で農産物を作り朝市で販売できるということを必死にならして取り組んできました。これからAPLAがネグロスの経験をインドネシア、東ティモール、東南アジアの小さな地域住民たちに拡

げていくことの根幹には、国家と関係のない、地域と人びとによる自給自足、自立のネットワークを作っていくという、ひとつの大きな夢がある。国という境を無視してでも人と人は繋がって生きていかなければならないということを実現したい。それがAPLAの活動になると考えます。

APLAに期待すること

大きなネットワーク作りとは、種を植え、ものをつくり、食べること、年間を通して人の流れ、ものの流れ、技術の流れを作っていくこと、そういったことを知恵を出し合って作っていくことです。東ティモールでは、すべての道は港に通じています。フィリピンもそう。

日本が落ち目になるのはとても早いぞです——まごめ

村井吉敬 / むらい・よしのり
早稲田大学教授



村井吉敬さん

日本のGDPが15位に落ちました。JCN Cが発足したのはバブルの絶頂期。それから20年経って経済大国から落ちて、落ち目の日本といわれていますが、今こそチャンスだと思っています。日本の農村は大きな問題を抱え瀕死の状態にあります。その理由は経済成長にありました。日本の成長を支えたものは工業化であり、それが伸

そのように経済の形ができてしまった。そこを無視した関係をつくっていくこと、それが私たちの目指す地域交流だと考えます。

03

あつちこち 雑学手帖 01

松田麻衣子 / まつだ・まいこ
APLA事務局



鋸状の山型がトゥンバルで、中には植物柄が描かれている。

今年、土方歳三没後140年。新選組といえはあの揃いの隊服姿だ。忠臣蔵の赤穂浪士を意識したんだら模様と当時の切腹袴の色である浅葱色でデザインされたという、終焉に向かう幕末期のサムライをしびれるほどに感じさせるあの羽織。まさに新選組を象徴するようなデザインであるというのに、実際の着用期間はほんの一時。赤穂浪士に至っては、だんだら模様なんて派手な出で立ちで敵討ちなど行っていない。討ち入りするにしても御用検めするにしても、目立つ上に実戦向きではないことを考えればすんなりと納得がいくが、ではなぜ、そして一体いつからだんだら模様になったのか。

災い防ぐだんだら模様

東インド会社がアジアの制海権を手中としていた頃、インドネシアからジャワ更紗が渡ってきた。多様で細かく色彩豊かな文様を持つそれはバティックともいい、流行りものになるさい江戸の人びとにも好まれた。特にバティックに施されたトゥンバルという鋸状の模様は、帯や陣羽織、そして明暦の大火後に創設された幕府直轄の消防組織である定火消の衣装にとさまざまな形で取り入れられた。トゥンバルの三角の中には植物の文様が入っており、インドネシアでは魔除けの意味を持つ。更紗は後に、和更紗として国産化もされた。江戸の文化に浸透していく過程でインドネシア的な要素が薄れたトゥンバルが、今日のだんだら模様になったというわけだ。

視覚的なデフォルムと派手な演出が要の歌舞伎の世界は、庶民以上に舶来ものには敏感だった。だんだら模様ではなかったにしても赤穂浪士は火消装束だったというから、既にあった定火消の衣装を流用したのか何にせよ、だんだら衣装の赤穂浪士は歌舞伎から生まれることとなる。

いかにも和柄だと感じていたものの由来がインドネシアにあったとは、だが知ってか知らずか、多くは死を覚悟した者たちが纏っていたことを考えると、魔除け効果の付加価値はあながち的外れではない気がする。

01



堀田正彦のアジア食い倒れ 01

堀田正彦 / ほった・まさひこ
㈱オルター・トレード・ジャパン代表取締役



インドネシアのスマトラ島のアチエ州からメタンへと州境を越える少し手前。パームヤシ均一の風景の中に、紫や赤や白のブーゲンビリアに包み込まれた小さなレストランがひっそりとたたずんでいた。

6人乗りのジープに乗って、長い道程を旅してきた私の目には、その場所が神聖なものに見えた。「ここで休憩！」と叫んで、車を止め、船酔いしている気分、やれやれと薄暗い店の中の粗末なテーブル席に座り込んだ。

「できますものは…スワップ・トゥランです。それだけです。」ときつぱり。ビール？ もちろんここはイスラム州だから無い！ のどの渇いた罰当たりな日本人には無慈悲である。少しすると、店の主人が深皿に入

ったスープらしきものと、ライスを運んできた。スープの中にはゴロンと一本の大きな骨がころがっている。25センチはあるだろう。

一口すすると、シナモンや唐辛子や様々な香辛料が複雑に混じりあい、牛のすね肉のダシが効いて、実に滋味そのもの。このスープをご飯にかけて食べると、これが滅法うまい。

飯ばかり食べていると、店の主人がしびれを切らしたようにそばに寄ってきて、私の手に長いストローを押し付けた。「なんだ？」と思う間もなく、今度は皿の中のすね骨を左手に持てと言う。次に、私の右手を持ってきれいな骨の切り口にストローを差し込んだ。そして「吸う、吸う！」という仕草。

一息吸い込んでみた。と、ズルズルと実に濃厚なものが口の中に入ってくる。「骨髓」である。うまいのである。少し吸い込んだら、主人がまた、骨をスープの中に戻せと言う。戻して、空洞にスープを流し込む。またストローですする。濃厚な骨髓がスープと混じり合ってますますうまい。

皆、感極まった顔で黙々とすすり続ける。もはや骨髓もスープも消え、皿と骨だけが目の前に横たわる。至福のとき、というものだろう。

スマトラ島で食べた『スワップ・トゥラン(Sup Tulang)』

04

じゃらん アジア 01

村井吉敬 / むらい・よしりのり
早稲田大学教授、APLA共同代表

ジュゴン受難

アラフラ海のアル諸島は、ニューギニア島西部の南、オーストラリアの北にある。いちばん大きな町はドボ、その昔、日本から出稼ぎダイバーたちが住み着いていた町である。ダイバーは南洋真珠の母貝である白蝶貝を採貝していた。アル諸島周辺海域には、ダイバーたちも海の中で出会ったであろうジュゴンがたくさんいる。

ジュゴンはクジラとおなじ海棲哺乳類で、人魚のモデルとして有名だが、各地で絶滅が叫ばれている希少動物でもある。インドネシアのパプアにファクファクという町がある。アル島の北西、ここもアラフラ海に面している。町の名前に惹かれて3年前(2005年)この町に出かけた。何と、人になつたジュゴンがいるという。地元のNGOのスタッフに案内され、行って見た。浅瀬の白砂の海、カヌーに乗せられた。船側を手で叩くと2頭のジュゴンが寄ってきた。頭を撫でてやっても逃げはしない。4頭がなついているという。NGOスタッフはエコツアーの目玉にしたいと言っていたがちょっと不便な場所、到着するのは容易だが帰路の確保が難しい。

この町ではトビウオの卵(ヒタマシ)が盛んにおこなわれていた。

02

むらを歩く ①

大野和興 / おおの・かずお
農業ジャーナリスト、本誌編集長

水路と産廃処分場

左右に小高い山、まんなかを谷筋がのびる。その入口に鉄板の高い囲いがある。中に踏み込むと、一面草が生い茂り、地面ははじめと湿地状になっている。鉄の囲いは、この谷間を産廃廃棄物で埋めようと計画した産廃業者が人をよせつけられないように設置したものだ。地元住民は地域ぐるみで反対運動に立ち上がり、裁判に訴えて建設を阻止している。

福井県池田町。人口3500人、合併しないでがんばっている小さな町だ。町内には38の集落がある。そのひとつ東俣集落は戸数59戸、うち51戸が農家で、農業に携わっている人の平均年齢は67〜8歳くらい、平場の田んぼはきれいに作付けされているが、一歩山沿いに入ると草や灌木が生い茂ったり、杉が植林された田んぼが目立つ。この地区で07年春、集落のみんなが参加する営農組合が動き出した。ほおっておくと、集落全体が高齢化する中で耕作放棄が続出する心配があるからだ。

世話役が集まって、最初の仕事として何をやるか、話し合った結果、町ぐるみで反対している産廃廃棄物処分場予定地につながる田んぼの水路を掃除することになり、夏の暑い盛り、みんなで半ば埋まっていた水路を掘りあげた。産廃が田んぼや谷



産廃業者が設置した鉄の囲い。

川の水をどれだけ汚染するかを一目でわかるようにしたいと考えたからだ。

良くも悪くも、集落を成り立たせている基盤は、営農と暮らしの両面での人と人とのつながり、つまり共同性である。いまその共同性が大きく崩れている。そして地域では、人びとを上から再統合しようとする集落再編の動きと、新しい時代に即した人と人の共同性を作り直し、人が安心して暮らせる集落にしようとする人々の内発的な動きとが、せめぎあっている。東俣の人びとは、崩れかけたむらの共同性を、産廃処分場反対をテコに、もう一度つなぎなおそうと思いついたのだ。きれいに掘り上げられた水路から、村の人たちのそんな思いが伝わってきた。



船に寄ってきたジュゴン。

日本向けである。かつては、スラウエシ島とボルネオ島の間のマカッサル海峡がトビタマ魚の中心だったが、乱獲で資源枯渇、ファクファクに移ったようだ。トビタマ魚にはココヤシの葉をたくさん使う。町からヤシの葉がなくなると地元の人はいびついていた。

ジュゴンは時速3キロでしか進まない。海草アマモを食べる平和的な動物だ。食べると美味しいらしい。牙齒は象牙のように商取引されている。人間に近いジュゴンにとって、は受難の時代がずっと続いている。沖繩の辺野古でも海上基地建設で住処を追われようとしている。

「じゃらん・じゃらん」とはインドネシア語で「散歩」を意味します。

今回のお題

パレスチナ産オリーブオイル

レポーター
吉澤真満子 / よしざわ・まみこ
APLA事務局長



パレスチナ産オリーブオイルを手にして。

(株) オルター・トレード・ジャバ (ATJ) で取り扱っているパレスチナ産オリーブオイルが日本に来たのは4年前。初めて手にとり蓋を開け、その香りをかいだ時から病みつきになっていく。パスタを作るときなど、このオリーブオイルとニンニクを軽く火にかけて匂いがかぐと、なんともワクワク幸せな気分になる。それから、密かにこのオイルは魔法のオイルだと思っている。

それはなぜかというところ、このオイルを使うと誰もが料理上手になったような気になるから。料理が上達する秘訣は、いかにおいしいものを簡単に作れるか、ということだと思えるのだが、それにうってつけのオイルなのだ。

サラダに、冷奴に、ソーメンに

このパレスチナ産のオイルは、オリーブの果実を搾るだけでいっさい化学的な加工をせずに作ったバージン・オリーブオイル。最初に搾られるので一番搾りともいう。スパイシータイプのオイルで、ちよつと癖のある味がする。しかし、それが病みつきになるのである。水菜や塩もみして搾った白菜、キャベツなどに、ツナを足してオリーブオイルを混ぜ、お好みでコショウを混ぜるだけで、高級感漂うサラダの出来上がり。おもしろくいつまでもバクバク食べてしまう。もっと簡単な使い方を最近教えてもらい、冷奴に醤油をかける代わりにオリーブオイルと塩を少々振り掛けるというのも美味。ATJのHPのレシピにもあるが、めんつゆとオイルでわって、ソーメンのつけ汁にするのも意外性があっておいしい。

お肌にもいいみたい

今回この記事を書くにあたり、食用以外のオリーブオイルの使用方法はないかと、ATJの担当者に聞いてみた。現地の担当者からの情報では、パレスチナの女性たちはマッサージオイルに使ったり、健康のためにスプーン一杯分くらいを飲んだりもするらしい。また、化粧落としにも使っていると聞き、ちよつと試してみた。

少しベトつくので多少ためらったが、パレスチナの女性たちの気持ちになってみよう！と思えば、顔につけてみる。そうすると、ふつとフルーティな香りが漂った。ああ、気持ちいい。そして、オリーブが果実であったことを思い出す。だんだん使い慣れてくると、少量のオイルで顔をマッサージすると、少量のオイルで顔にまでベトつかないこともわかってきた。ただ、マスカラなどが落ちにくいのので、しっかりメイクの人にはお勧めできないかもしれない。またオリーブオイルには紫外線を吸収する働きがあるため、長時間外にいるときは、日焼け止めの下にオイルを薄く塗るのも効果的とか。ぜひお試しあれ。

● ATJ web site オリーブオイルレシピ http://www.altertrade.co.jp/02/poo/poo_06.html
● 参考文献 『環境市民の遊びかた暮らしかた』特定非営利活動法人 環境市民

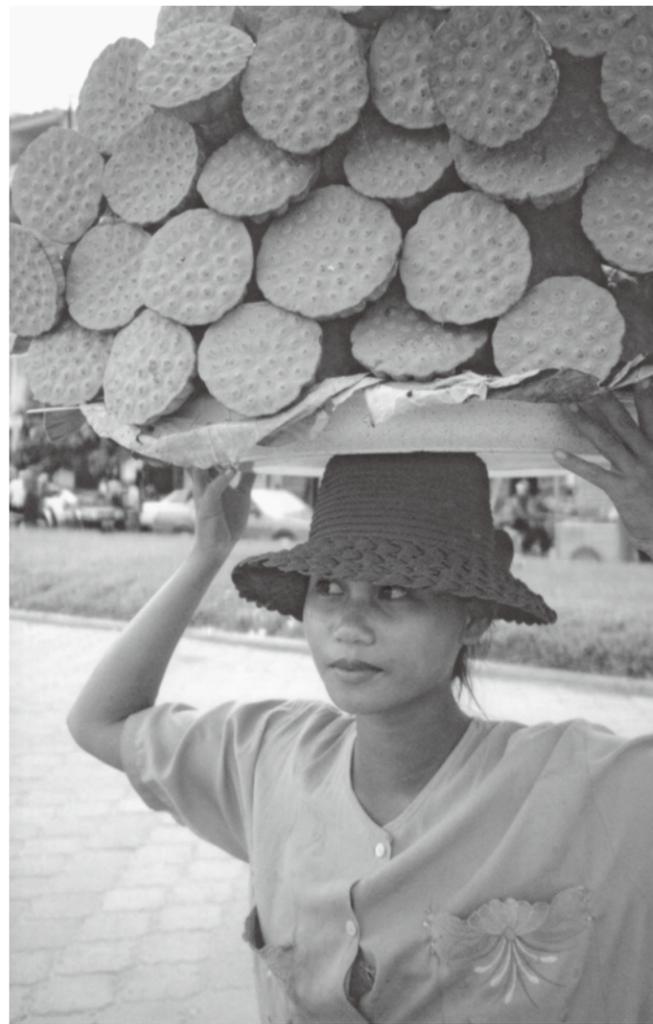
撮っておきアジア

Totteoki ASIA

01

撮影者◎中村真珠 / なかむら・まみ
撮影場所◎カンボジア、プノンペン

このコーナーではAPLAの会員の皆様が出会ったアジアを写真でご紹介。旅をして出会ったその地域の生活や風景、人間模様など、普段私たちの目にしないアジアを覗いてみましょう。



カンボジアの首都プノンペンにて。道端に座っていたら、ハスの実を売りに歩いていたお姉さんが通りかかった。ひとつ買ってカメラを向けたら、しゃなりと立ってポーズしてくれた。(2000年2月撮影)

このコーナーでは皆様の写真を募集しています。

募集内容◎アジアを旅した写真5枚(日本も含みます) ※5枚全てが採用されるわけではありません。1枚もあれば細写真の場合もあります。

写真◎デジカメ撮影の場合・画像設定を「FINEモード」以上で撮影しているもの。プリント写真の場合・そのままご送付下さい。後日ご返却いたします。

締切日◎随時受け付け、次号以降に掲載します。

送付方法◎データの場合→メール添付で。プリントの場合→郵送で。

送付先◎APLA/あぶら事務局 ハリーナ写真係 まで
郵送→〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-15サンライズ新宿3F メール→info@apla.jp

皆様からの応募をお待ちしております！

APLA事務所で甘味づくりをしました

とても簡単で、冷たくておいしいです。夏のおやつにどうぞ。

マスコバド糖の寒天ゼリー (上写真左)

- 【材料】
●寒天.....4g ●水.....250ml
●マスコバド糖くろみつ.....120ml
●バニラアイス.....適宜



【作り方】

- 寒天と水を火にかけて、2分ほど沸騰させ溶かします。
- 火を止め、①にマスコバド糖くろみつを混ぜながら溶かす。こし器を通してバットなどに注ぎ、冷蔵庫で2〜3時間冷やし固める。
- 固まったら、スプーンなどですくって器に盛り、バニラアイスをのせたり、生クリームをかける。

ココナツ寒天ゼリーのくろみつかけ (上写真右)

- 【材料】
●寒天.....8g ●水.....大さじ4
●マスコバド糖.....30g ●牛乳.....1カップ
●ココナツミルク(缶詰).....1カップ
●マスコバド糖くろみつ.....適宜



【作り方】

- 寒天は分量の水にふり入れ、ふやかす。
- 鍋に、牛乳、マスコバド糖を入れ、ひと煮立ちさせる。マスコバド糖が溶けたら火からおろし、①を加え、木べらで混ぜながら溶かす。
- ②にココナツミルクを加えてよく混ぜる。こし器を通してバットや流し缶に注ぎ、冷蔵庫で2〜3時間冷やし固める。
- 固まったら、スプーンなどですくって器に盛り、くろみつを適宜かける。

(各料理所要時間約15分)

あぶらが動きだし、「ハリーナ」も新しくなりました。編集長をおおせつかった大野和興です。よろしくお願ひします。どんな記事でも、読まれなければなんともなりませんので、まずは読みやすさと親しみやすさを追求したいと思っています。また、みんなで作るメディアにしたいとも考えています。ご意見、ご提案、お寄せください。(大野)

JCNC時代から名前を継承して、APLA／あぶらの機関紙も「ハリーナ」とし、第2巻という形で出発しました。第2巻では、毎号特集を携えて、APLAが考えていること、知りたいことなどを発信していけたらと思っています。よろしくお願ひします。(吉澤)

この度「ハリーナ」第2巻1号が無事発行となりました。関わってくださった皆さまに感謝です。既に個人的お気に入りページもでき、一読者として今から次号が楽しみに。読者の皆さまにも楽しんでいただけたら幸いです。今後ともよろしくお願ひします。(松田)

ハリーナ HALINA

2008年夏号 vol.02-no.01
2008年8月1日発行

編集長
大野和興

編集者
吉澤真満子、松田麻衣子

表紙写真
長倉徳生

イラスト
保光美由紀

デザイン・制作
十年舎

編集・発行
APLA／あぶら
(オルタナティブ・ピープルズ・リンケージ in アジア)
〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿 3F
tel. 03-5273-8160
fax. 03-5273-8667
e-mail info@apla.jp
URL http://www.apla.jp

印刷
株式会社セイズ

APLA共同代表、スタッフからご挨拶

共同代表
秋山真児／あきやま・なおえ

食べ物、自然環境・生態系はもとより、私たちの毎日の生活の場を真剣に見つめれば、そこには希望のひとかけらさえ見出せない事態になっているのではないだろうか。この未曾有の「悪い時代」「深い闇」から逃げるのではなく、ひととひととが繋がりあい、言葉を交わし、考え、発言し、そして協働していくことだけが、新しい光が差し込む割れ目をつくり、希望を生み出す力になるだろう。APLAは、そのための一つの場として、運動として歩んで行きたいと思う。



共同代表
疋田美津子／ひきた・みつこ

JCNCによって切り開かれた地平はAPLAによってどう引き継がれていくのか？日本とネグロスの人々が農と食を通してつながった一本道が、APLAによってさらにアジアの他の地域との何本もの道を生み出し、それぞれがつながる網目となっていく。その動きが、各国の国内において、農民や漁民や都市に住む人々をつなぐ道を作り出していくことを期待しています。APLAの作り出す地図がグローバル化をものともしない活気ある人々の交流・交通図となりますように。



インドネシア・東ティモール担当デスク
津留歴子／つる・あきこ

APLAに望むことは、人と人の出会い、経験の分かち合いによって、希望と勇気と友情を育み、お金や権力から縁遠い人たちがますます元気になること、心豊かになることです。これはAPLA設立総会のために集まったフィリピン、インドネシア、東ティモールの友人たちが山形ノラの会と交流したときに実感したことです。漠然としています、APLAは人が集い、夢を語り、それを実現するパワーを生み出す場になると思います。



■ APLA共同代表	
秋山真児	麻布学園理事・教員
疋田美津子	しらかのノラの会
村井吉敬	早稲田大学教授

■ APLA理事	
秋山真児	麻布学園理事・教員
市橋秀夫	埼玉大学教養学部准教授

共同代表
村井吉敬／むらい・よしのり

民衆交易船「APLAポート」はどうでしょう？ APLAは、とりあえずは、ネグロス＝北ルソン＝東ジャワ＝東ティモールと日本をつなぐ民衆交易ネットワークだ。スラウェシ島に伝統的な木造帆船ピニシがある。この船でバナナやエビやコーヒーを運んでみたらどうだろう。白鷹の干し柿が東ティモールに行ったり、エコシリンプが北ルソンに行ったり…、おもしろい交流を考えましょう。APLAカフェ・ショップも早くつくりたいですね。



フィリピン担当デスク
大橋聖子／おおはし・せいこ

JCNCが幕を引き、APLAが誕生するまでの1年間、JCNC事務局で仕事をさせてもらいました。その間、活動を支えてくださった多くの皆様に心から感謝します。7月からはネグロス島に戻り、APLAのフィリピン駐在として、ネグロスと北部ルソンの仲間たちの息吹をお伝えするとともに、オルタナティブなリンケージを創る仕事の一端を担いたいと思います。皆様とネグロスでお会いする日を楽しみにしています。



事務局
吉澤真満子／よしざわ・まみこ (写真中央)
松田麻衣子／まつだ・まいこ (写真右)
野川未央／のがわ・みお (写真左)

3人とも身長150cm ちょっとの小柄ですが、周りの共同代表や海外デスクにも負けないようにしていきたいと思います。専従は吉澤と松田、野川は週2回勤務となります。限られた人員の中でやっていきますので、至らない点もあるかと思いますが、会員の皆さんとAPLAは作っていきたくと思っています。叱咤激励やたくさんアイディアをお待ちしております。どうぞよろしくお願ひします！



上田 誠	(株)オルター・トレード・ジャパン
大野和興	農業ジャーナリスト
鹿毛優子	グリーンコープ共同体本部副組合員事務局長
疋田美津子	しらかのノラの会
広瀬康代	フォーラム・アソシエ事務局長
村井吉敬	早稲田大学教授
吉澤真満子	APLA事務局長

原油価格の高騰に引き続いて食糧も高騰、世界中の人々の暮らしの足元を直撃しています。日本でも食料品が軒並み値上がりするなど、ハリーナ読者のみなさんもその影響を肌で感じられているのではないのでしょうか。APLAでは、フィリピン、インドネシア、東ティモールのパートナーに対して、地元の人びとの生活にどんな影響が出ているのか、急遽インタビューを行いました。

【表1】ディーゼル1リットルあたりの価格変動

	2007年	2008年6月	
インドネシア	4300ルピア ▶	5500ルピア	1.2倍
東ティモール	約1米ドル ▶	1.55～1.84米ドル	1.5倍以上
※あるガソリンスタンドのオーナーは7月に入ったら「2ドルまであげる」と発表している。			
北ルソン	38ペソ ▶	50ペソ	1.3倍
ネグロス	40ペソ ▶	51ペソ	1.2倍

【表2】米1kgあたりの価格変動

	2007年	2008年6月	
インドネシア	4500ルピア ▶	5500～6000ルピア	1.3倍
燃料費値上げが原因となって、米以外にも生活必需品(砂糖、卵、肉など)も値上がりしている			
東ティモール	0.55米ドル ▶	0.82米ドル	1.5倍
政府による価格コントロールがないことが原因			
北ルソン(※)	30ペソ ▶	42ペソ	1.4倍
世界価格の上昇に伴った値上がりであり、資本家が維持する搾取的システムに組み込まれている			
ネグロス(※)	25ペソ ▶	43ペソ	1.7倍
今年3月あたりから急激に値上がりした。18.5ペソという価格で販売される政府米を購入するために貧困層が長蛇の列をつくっている			

※良質な米の場合

1インドネシアルピア＝約0.0125円
1米ドル＝約100円
1フィリピンペソ＝約2.4円
(2008年6月現在)

るをえないのも事実です。ちなみに、東ティモールのダニエルさんからは、先週地域で乳児が一人死亡したが、その原因の一つは栄養失調ではないか、という悲しいニュースが送られてきました。

紙面の都合上、かなり簡単にまとめさせていただきましたが、何よりもはっきりしていることは、現在の世界的な原油・穀物価格の高騰によって、民衆の生活がより厳しい状況に追い込まれているということです。この背景には、投機マネーの流入、つまりグローバル資本による「買占め」が存在していることは今後も注視していく必要があると思います。一部の人が自らの儲けのために、民衆の生存に直結したエネルギーや食糧までも支配、破壊しつつある現在の状況に対して、わたしたちは何をすべきなのか。今後も継続して考え、アジアの仲間たちとともに行動していきたく考えています。

(インタビューまとめ・事務局野川)

Voice from APLA partners

原油・米高騰 アジアの地域の人たちは今…

ルを突破。各地での燃料費の値上がりは…？ ディーゼル1リットルあたりの価格を聞きました。【表1】

一人びとの毎日の食事に欠かせない米の値上がり状況はどうでしょうか？ それぞれのコメントも掲載します。

一人値上がりの結果、こうした状況が引き起こされているのでしょうか？

どの地域も状況は似ており、特に苦しんでいるのは、「小さな民」、つまり農民、漁民、

そして工場労働者(＝都市の貧しい層)などです。人びとの収入はほとんど上がらないのに、物価ばかりが上がっているため、みな非常に苦しい生活を強いられているといえます。その一方で、ネグロスからの回答は興味深く、農民は自給によってある程度の生活を維持できているものの、貧しい労働者は何の生産手段も持っていないため、非常に厳しい状況を強いられています。この報告がありました。ここに、APLAが目指している「農業で食べられる地域づくり」の可能性がはっきりと見

えてくるように思います。

一人では、そうした厳しい状況を人びとはどうやってしのいでいるのでしょうか？

これについても、すべての地域からほぼ同じような回答がありました。米だった主食を、キャッサバ、とうもろこし、サゴヤシ、イモなどにかえる、もしくは、米のなかにとうもろこしなどを混ぜてかさを増やす、などしてどうかしのいでいる、ということ

です。にもかかわらず、食事の量を3回から2回に減らしたり、一食分の量を減らさ

るをえないのも事実です。ちなみに、東ティモールのダニエルさんからは、先週地域で乳児が一人死亡したが、その原因の一つは栄養失調ではないか、という悲しいニュースが送られてきました。